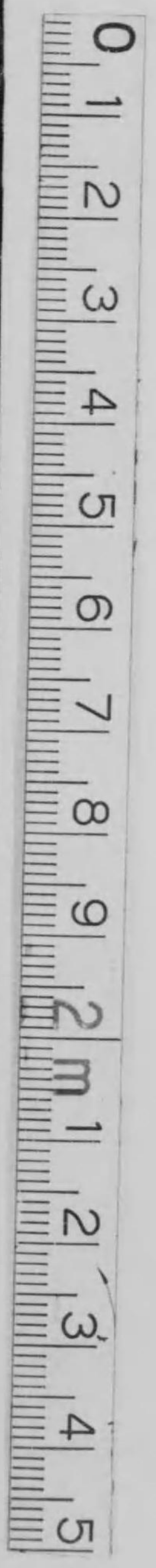


70  
337



始





# 親鸞聖人

醫學博士 文學博士  
富士川 游著



無我山房發行

✓



70-337



親鸞

聖人

富士川



游著

大正  
5. 2. 22  
内交



はしがき

この一小篇は、余が嘗て、中央公論の紙上に掲げたるものに、多少の修正を施したものである。余が始めて親鸞聖人の教を聴きてから三十年、聖人の教を傳へたる書籍なども略ぼ閲讀して、大體眞宗の要旨を瞭解することが出来たと信じ、親鸞聖人の教につき、余が考ふるところを叙述したのである。これにつきては、幾多の方面より、種の批評が出たやうであるが、余はこれ等の諸家と意見を闘はす積では無い。余はただ、余が親鸞聖人の教より



得たる宗教的經驗に對して感謝の意を表する考で、聖人の教を今の世の有識者の間に廣めたいのである。まことに、つまらぬ一小篇ではあるが、原子氏がこれを別刷にして、廣く世に頒布するやうに勧めらるるので、中央公論社主麻田氏の快諾を得て、これを一小冊として、ここに刊行することとしたのである。

大正四年十二月中旬

富士川 游

### 親鸞聖人目次

法然聖人……………	二
聖道と淨土……………	六
專修念佛……………	九
形式的修行……………	一一
念佛停止……………	一三
親鸞聖人……………	一七
淨土眞宗……………	二二
師教の紹述……………	二六

目次



目次

親鸞聖人の信仰	三二
阿彌陀佛	三八
宇宙の本態	四四
精神科學	四七
自然科學	五二
二元論	五六
新活力論	五九
一元論	六二
唯物論	六四
汎神論	六七

靈魂不滅	六八
一元論と佛教	七二
基督教	七四
一元論的宗教	七五
宇宙即如來	七九
宗教的象徴	八三
佛凡一體	八七
安養淨土	八九
往還回向	九四
在家の宗教	九六

目次



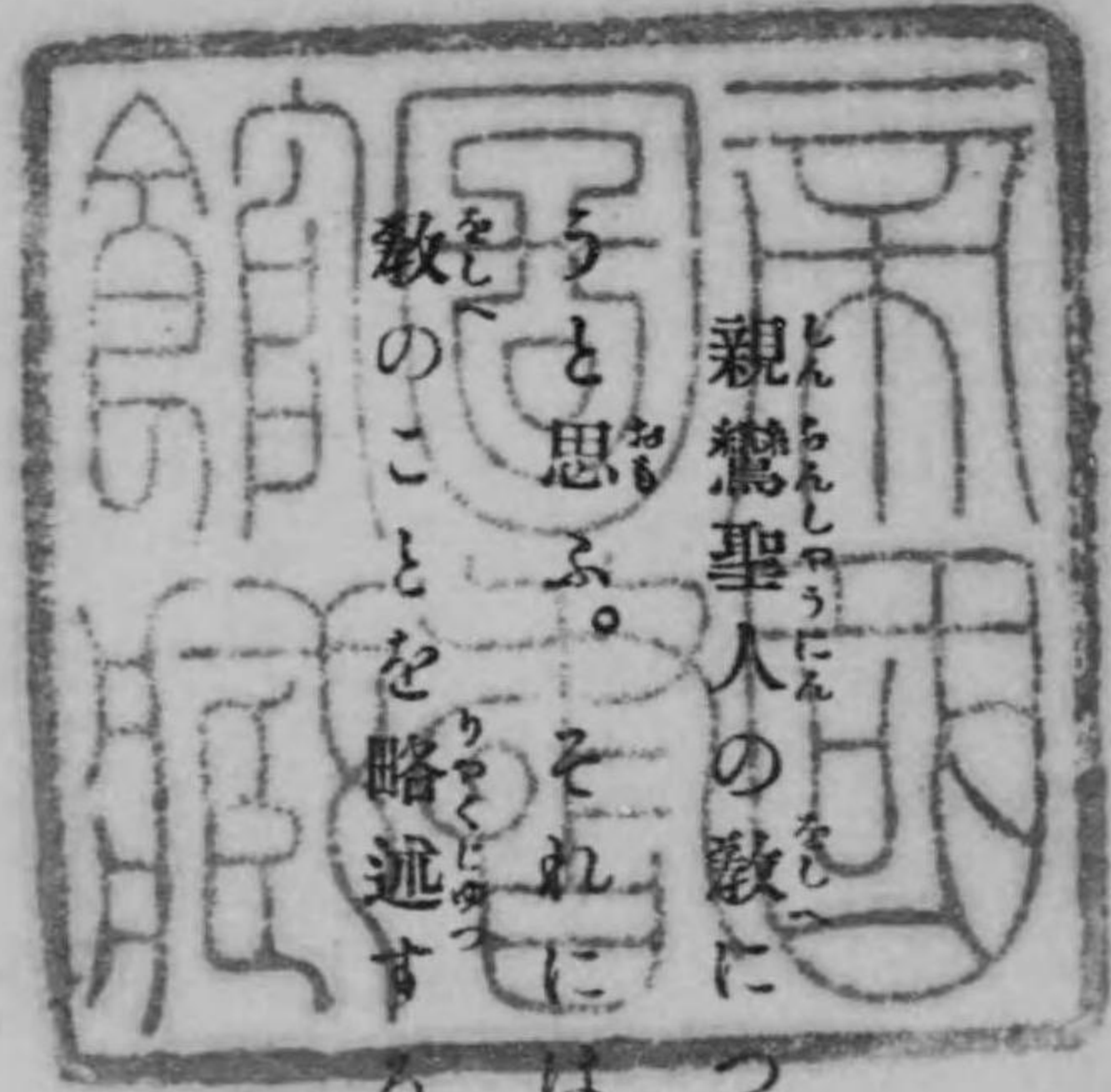
目次  
宗教と科學……

四  
九九



親鸞聖人

富士川 游著



親鸞聖人の教につきて、余はここに、卑見を述べて見よ  
うと思ふ。それには、まづ浄土宗の元祖たる法然聖人の  
教のことを略述するの必要がある。

法然聖人



法然聖人

保元平治の亂が平定してから十六年、平清盛が太政大臣として榮華を窮めた最中、高倉天皇の安元元年に當年四十三歳の元氣盛りの僧、法然は、二十年來、苦心に苦心を重ねて、自得したる出離生死の道を述べ、聖道自力の修行を捨て、淨土他力の法門を擧げ、往生の業は唯念佛を以て本とすることを説いた。法然は、もと美作の國、久米の南條、稻岡の莊の押領使の子である。九歳のときに父を失ひ、十五歳の時に比叡山に登つた。幼時より聰敏で、文

殊に擬せらるるほどであつた。久安六年、出離生死の道を求むるの念が急であつたために山を下りて、黒合の慈眼房、叡空の門に投じた。叡空隨喜して、『汝少年にして出離の心を起せり、まことにこれ法然道理の聖人なり』といひて法然を房號とした。時に法然は十八歳の少年であつた。それから報恩藏に入りて、幾たびとなく一切經を讀むで見たけれども、胸裡の煩悶を慰めることが出来ず、保元元年、花の都が修羅の街となつた頃に、叡空の許を辭し、嵯峨の清凉寺に七日の參籠をしたけれども、何等の驗もなかつた。それから奈良へ赴き、興福寺の藏俊に



就て唯識を學び、又京に歸て、醍醐寺の寛雅から三論の教を受けた。すべてこれ假名の學問、空虚の形式であつた。出離生死の道を求むる爲には何の益にもたゝなかつた。それで、法然は數年の修行も、少しも得るところがなく、茫然として黒谷の叡空の許に歸つて來た。いかにもして、凡夫の出離を許すの道を求めむと、寢食を忘れて、聖教に向ひ、我が凡夫に相應する法門ありやと焦慮せしが、はからずも、源信僧都の往生要集を讀み、『往生極樂の教行は濁世末代の目足なり』とあるを見て、忽ちこゝに希望の曙光を認めた。それから善導大師の散善義を讀みて、『一

心專念彌陀名號、行往坐臥、不問時節久近、念念不捨者、是名正定之業、願彼佛願故』といふことを知り、胸中の苦悶、忽ちに去り、『出離生死の要道は唯念佛の一行にあり』といふことを悟つた。



聖道と浄土

法然が説教する所を聴くと、佛の道に入るには種々の門があるが、大別してこれを聖道と浄土との二門とする。聖道門といふのは娑婆世界にありながら煩惱を断ち、悟りを開く道で、これに大乘と小乗との別がある。しかながら、聖道門は開き難く、入り難く、末世の凡夫の行には相應せぬ。浄土門といふのは娑婆世界を厭ひ捨て、浄土に生まるゝことを期するので、浄土に生まるゝといふことは阿彌陀佛の本願である。故に人の善惡を選ば

ず、彌陀佛の本願を頼めばよろしい。故に、いかなる凡夫でもこの道に入ることは容易である。しからば、この浄土門に入りて、浄土に生まれんことを望まば、如何にすればよろしいかといふに、安心と起行とが必要である。安心とは至誠心、深心、廻向發願心の三心を具ふることをいふのである。至誠心とは眞實の心である。深心とは我が身が煩惱を具足せる凡夫であるといふことを深く信ずる、又阿彌陀佛が四十八通の誓願を立て、衆生を攝取したまふといふことを深く信ずるのである。廻向發願心とは我が身の過去並に現在に於ける功德を浄土に廻向



して往生を願ふのである。起行とは往生の行に讀誦、禮拜稱名、讚歎、供養など多數ある内、一心に専ら彌陀の名號を唱へて、行住座臥に忘るゝことなく、念々に捨てざるを正定の業と名づけて、これを極樂往生の正行とするのである。それで、淨土に往生せんと思はば、この念佛の行を起して、阿彌陀佛の本願の力を頼めといふのである。

專修念佛

法然が説くところの義は、此の如くに實に明瞭である。阿彌陀佛の本願は衆生を攝取するにある。我等凡夫は阿彌陀佛の慈悲に對して至誠心、深信、廻向心を具ふればよろしい、至誠心、深信、廻向心の三心、これを約めて言へば信の一字である。信心即ち往生である。我等は煩惱具足の凡夫である、自力の行を以ては往生の出來にくいものである。只管に阿彌陀佛の慈悲に頼り、その本願の力を借るより外はない、一切の疑念を去つてただこれを信



ずる外に何もないのである。阿彌陀佛の智慧と慈悲とを信じて佛の御名を呼ぶ外に往生の行といふべきものは無い。これが法然の念佛の要義である。これを要するに、法然が専修専念を主旨として、興したる淨土宗の教は、阿彌陀佛の慈悲を説くのである。もとより八萬四千の聖教の中には種々のことが説いてあるがその主眼とする所は阿彌陀佛の慈悲である、この慈悲を認めて、その力に頼るのが専修念佛の本旨であるといふのが法然の主張である。

形式的修行

法然が黒谷を出て、吉水に移り、専修念佛の法を説いたのは承安四年である。桓武天皇の時に、最澄、空海の二僧が出で、最澄は比叡山に延暦寺を開きて天台宗を傳へ、空海は高野山に金剛峰寺を立て、眞言宗を傳へ、その時までの教旨に一段の進歩を示してから四百年になる。奈良朝以來我邦に傳はつた佛敎には三論、法相、俱舍、成實、律、華嚴等の各派があつたが法然が専修念佛を唱へたる當時は、天台と眞言とが最も盛て行はれて居つた。天台宗



は法華經に據り、眞言宗は釋迦の外に大日を立て、即身成佛の新義を唱へて其他の宗旨とは面目を異にして居つたが、しかし此等諸宗の僧徒が寺院で講釋する所は深玄高妙を窮めたる佛教哲學で、その日常行つた所は形式的なる修行であつた。それで、佛法そのものも、僧徒と名づくる一種の階級のもの外には殆ど無關係といふべき状態であつた。又その出離生死の道は、六度萬行の功德によつて成佛が出来るといふのであるから、從て諸佛に祈請し、或は病氣の平癒を祈るなどいふやうなことが始まり、僧徒の多數はこれを日常の業務として居つた。

念佛停止

しかるに、法然の專修念佛の教は、此の如き思想を根柢から覆へし、煩瑣なる哲學を排するために僧徒の生命なる經論が無益となり、又如何なる悪人も專修念佛によりて往生することを主張するがために當時の宗教が重きを置いた戒律がその權威を失なふことになつた。此の如き、宗教界の一大革命に對し、始めは『法然果して何事をか成さむ』と嘲笑せる南都北嶺の學僧等も、これまで久しく無益の經釋に厭き一切を捨て、出離生死の道



を求むるものが歡喜して法然の教に歸依すること、草の風に靡くが如くなるを見て、大に忿怒し、比叡山の僧徒先づ噪ぎ立ち、次で奈良の僧侶も法然を攻撃し始めた。その中には明慧上人、解脱上人等の名僧も居つたのである。その言ふ所に據ると、法然が菩提心を以て極樂往生の行とせざるは誤である、菩提心とは無上正覺の心であるのに、この佛法妙華の菩提心を捨て、往生の果實を結ばむと望むは無理である。佛果の功德が名號の功德に及ばぬといふも誤りであると論するのである。もとよりこれは新舊思想の衝突で、法然の方から言へば、這般の駁論

はすべて見當違ひのもので、すこしも駁論としての價値はない、しかし、反抗の火の手は益々熾になつた。比叡山の僧徒は法然が差出したる起請文によりて一旦その怒を鎮めたが、南都興福寺は、邪宗を立つる罪、釋尊を輕侮するの失、萬善を廢するの事、國家を亂壞するの賊等九箇條の罪目を擧げて、念佛停止の儀を朝廷に訴へた。此の如くにして、法然の教は、敎權の方からと、敎理の方からと、敎化の方からと、三方面から壓迫せられた所へ、宮中の女官などに念佛の信者が出來て、それが物議の種となり、一時は旭日の昇るが如き勢のあつた吉水も、到頭包圍攻撃に堪



ゆることが出来ず、承元元年二月、法然は、僧儀を廢せられ、藤井元彦の俗稱で土佐の國へ流さるゝことになつた。この時、門人の内で死刑に處せられたものが四人、流罪に處せられたものが七人、その一人、善信房といふが、越後國に流された。善信房、罪名藤井善信、いふまでもなく、これが、すなはち親鸞聖人である。

親鸞聖人

親鸞聖人、俗姓は藤原氏、父は皇太后宮大進有範、母は吉光女源氏の出である。早く父母を失ひ、伯父範綱に養はれしが、心何となく悲しく、明けても暮れても、心を痛め居りしが、養和元年、遂に青蓮院慈圓僧正の室に投じて得度し、法名を範宴少納言と稱した。時にその年九歳であつた。養和元年は安徳天皇の元年で、この年二月には、平相國入道が熱を病みて薨じ、翌年は壽永元年で、木曾義仲が京師に入り、平宗盛は天皇を奉じて讃岐に走つた、歴史上



興味きょうみの多い年としである。それからはん範あん少せう納な言ごんはさい叡い山ざんに登のぼり、入い壇だんしてまん圓ん頓とん菩ぼ薩さつ戒かいを受け、南なん都とにもわう往らう來らいして、天てん台だい華り嚴ごんのあう奥う旨しをき窮くわめ、廿じふ五ご歳さいの時ときにはすで既ににしやう聖くわう光めん院の門もん跡せきとなつた。親しん鸞らん聖しやう人にんはさい叡い山ざんにありてく俱しゃん舍らん論も讀よむだ、唯ゆい識しき論も讀よむだ、天てん台だいのだい三ざい大だい部ぶもよ讀よむだ、又また奈な良らにおも赴むきてほう法しやう相さう三さん論も修しゆめた、律りつをも修しゆめた、華け嚴ごんをも學まなんだ、一さい切きやう經きやうをも讀よみ破やぶつた。大だい小せうのけう教さう相げん顯み密みつのしん深しん義ぎをけん研けん究きゆうすること二に十じふ年ねんのひさ久ひさしきに及およむだ。しかも出しゆつ離りのみち道みちをもと求もとめむと焦慮りよせるきやう胸きやう裡りのはん煩もん悶もんはか却かつてひ日ひにま益ま々ま其その度どをつよ強つよくし、寢ねむればさ覺さめ、覺さむればおも思おもふといふあり有あり様さまにてほん殆たどみ身みのおき置おき所ところな

きままでにくる苦くるしむだ。到たう底てい人じん力りきのほ施しがたきことを認めて、六ろく角かく堂だうにま參まり、上じやう宮ぐう太たい子しのれい靈れい告こくをいの祈いのつた、そのかへ歸かへり途にあ安あ居い院いん聖せい覺かく法ほふ師しにあ遇あひ、吉よ水すいにほふ法ほふ然ぜんがじやう淨じやう土と他た力りきのを教を説とくことをき聞きておほ大だいによろこ喜よろこび、直ちちに法ほふ然ぜんのもと許もとには走はつた。出しゆつ離り生しやう死じのえう要えう道だうはた唯た念ねん佛ぶつしてあ阿あ彌み陀だ佛ぶつにたす助たすけられる外ほかはな無ないといふことをほふ法ほふ然ぜんからと説とき聞かされ、ここにた忽たちしやう聖しやう道だう自じ力りきのみち道みちをす捨すてて、凡はん夫ぶ直ち入にふのしん真しん心しんをけつ決けつ定ていし、法ほふ然ぜんのもん門もん人じんとなつた。法ほふ然ぜんもか斯かくす速すみかにしやう聖しやう道だうのほふ法ほふをす捨すて、淨じやう土とのを教をし、入いりたるもの者ものはその類るいがまれ稀まれなりとかん感かん歎たんし、西さい河か禪ぜん師じのよ餘よ風ふうありとて、そのな名なをしやく綽くわう空くわうとま授まけた。このとき時とき親しん鸞らん聖しやう人にんは



齡二十九歳であつた。それから三十五歳の春、その師と共に流罪に處せられたときまで丁度六年の間、聖人は、法然に親炙したのである。入門の順序からいふと、他に多くの先輩があつて、元久元年の冬、法然が比叡の忿怒に遭つて起請文を送つた時、親鸞聖人は、綽空の名前で百八十五人の門人中、第七十九番目に自署して居た位であるが、しかし、親鸞聖人が法然の信用を得て居つたといふとは、法然が自選の選擇本願念佛集を第一番に親鸞聖人に附屬したといふ一事でもわかる。選擇本願念佛集といふのは、法然が元久元年に月輪禪定兼實公の命によりて選

集したもので、念佛の奥義を説いたもので、法然は秘して誰にも見せなかつたのを、その翌年に親鸞聖人に寫すことを許したと傳へられて居る。正信偈に『本師源空明佛教、憐愍善惡凡夫人、眞宗教證興片州、選擇本願弘惡世』と言つて、親鸞聖人は明かに法然を以て日本念佛の祖師と仰ぎ、始めて淨土宗を立て、又選擇集を作りて善惡の凡夫のものをあはれみ、その教を惡世に弘めたる徳を頌して居る。その他にも、親鸞聖人は屢々その師、法然を推稱して居る。



淨土眞宗

一代の高僧法然が全力を擧げて企圖したる宗教界の大革命は、その門人たる親鸞聖人に至りて遂に成功した。親鸞聖人は、その師法然が『往生之業、念佛爲本』と説いて、稱名往生説を唱へたる眞意義を攬み、更に一步深く進みて、『稱名則是、最勝眞妙正業、正業則是念佛、念佛則是、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛則是正念』なりと言ひて、信心往生説を唱へたるは、眞に念佛の意義を徹底せしめたもので、親鸞聖人はまことに法然の門人たるに耻ぢぬ人とな

言べきである、然るに親鸞聖人が法然の門下にありながら、此の如く、師説を廢し、自から信心往生の説を立てたのを、異解であるとして、法然門下の他の人々が親鸞を排斥して居るのは、畢竟門人等が凡庸でその師匠の眞意を受くることが出来ぬためである。法然の選擇集には『若し善導に依らば廢立を以て正しとす』とありて、廢立とは雜行往生を廢して念佛往生ばかりを立つるといふ意味で善導大師の説に據れば雜行を許さぬ方が正しいと言つて居る。故に法然が謂ふ所の念佛は如來選擇の願心より廻向したまはりたる念佛で、強ち自力の雜行を要



するものではない。しかるを、法然の門人等、『雑行も念佛も往生するとして、二類各生を立て雑行雑修も至心廻向すれば往生する』といふ説を立て、『念佛の中にはらみてある萬善萬行なれば雑行も念佛胎内の功德なるゆゑ、別に捨てることなし』として雑行を許した。それ故、親鸞は『淨土宗の中に眞あり、假あり、眞といふは選擇本願なり、假といふは定散二善なり、選擇本願は淨土眞宗なり、定散二善は方便假門なり、淨土眞宗は大乘の中の至極なり』と唱道し、法然門下の一派に對抗して、淨土眞宗の名稱を選び、自から新しい一派を成した。しかも、親鸞聖

人は、これが法然の眞意であると繰返し、高僧和讃の法然の條下にも『本師源空あらはれて、淨土眞宗を開きつゝ、選擇本願のべ給ふ、善導源信勸むとも、本師源空弘めずば、片州濁世のともがら、いかでか眞宗をさとらまじ』と、法然の源空を讃仰して居る。



師教の紹述

元來、宗教といふものは卓越した箇人の人格に現はれたる宇宙觀と人生觀とに基いて生れ出づるものであるが、法然は實にこの點から見て偉大の人格である、法然が専修念佛の唱道は當時の有様では實に大膽不敵の振舞であつた。しかも法然は嘲罵の中にありて少しも争ふことなく、だゞ孜孜として、その思ふ所を實行した。法然は一切を南無阿彌陀佛の六字に包むで、只管に念佛稱名を勧めた。淨土門は易行道を行くものであると言つて、

經論の詮索を無用とした。阿彌陀佛の御誓は有智無智を問はずと言つて、僧俗の墻壁を破つた。法然は又寺院を建てるなと言つた。その新宗教を實際生活に副はしむるために山より都に下して、又その門人親鸞聖人をして妻帯せしめた。法然の門下には數多の英才も居つたが、此の如き法然の眞意を瞭解したものはなかつた。親鸞聖人は自著の教行信證の末に

「竊に以みれば、聖道諸教は行證久しく廢たれ、淨土眞宗は證道今に盛なり、然るに諸寺の釋門教に昏くして眞假の門戸を知らず、洛都の儒林行に迷て邪正の道路



を辨わかふるとなし、斯こゝを以もつて興福寺學徒がくと太上天皇たいじやうてんわう羽後はご院いん諱ごん成せい今いま上じやう院いん諱ごん爲なり仁にん聖せい曆れき承じやう元げん卯う歲さい仲ちゆう春しゆん上じやう旬じゆんの候こうに奏そう達たつす、主しゆ上じやう臣しん下げ法はふに背そむき義ぎに違ちがひ恐おそれを成なし怨うらみを結むすぶ、茲こゝに因よつて眞宗しんしゆう興隆きゆうりゆうの太祖たいそ源空げんくう法師ほふし並なら門もんに徒數輩とすうはい罪科ざいこを考かんがへず、猥みだりがはしく死罪しざいに坐まし、或あるひは僧義そうぎを改あらためて姓名しやうみやうを賜たまひ、遠流えんりゆうに處しよす、予よも其その一ひとなり、爾者しかれば已すでに僧そうに非あらず、俗ぞくに非あらず、是こゝの故ゆゑに禿くの字じを以もつて姓しやうとなす、空師くうし並ならに弟子等でしら諸方しよはうの邊州へんしゆうに坐まして五年ごねんの居諸きしよを經へたり、皇帝くわうてい諱ごん守成しゆせい聖代せいだい建曆けんりやく辛未しんみ歲さい四月中旬ししげつちゆうじゆん第七日にちちやくめん勅免ちやくめんを蒙かうむりて洛らくに入る、已後いご空くうしく洛陽らくやう東山とうしやまの西麓にしふ鳥部野とりべのの北きたの邊ほとり大谷おほたにに居こ

し玉たまへき。同二年壬ねんみづのえの申寅月しんいんげつ下旬じゆんたいご第五日にちうまのどき午時にふめつ入滅にふめつし玉たまふ、奇瑞きせき稱計しやうけいすべからず、別傳べつでんに見みえたり、然しかれども、愚ぐ禿釋親鸞くしやくのしんらん建仁けんにん辛酉しんしゆうの曆れき雜行ざふぎやうを棄すてて本願ほんげんに歸きす、元久げんきう乙丑おつしゆうの歲さい恩恕おんじよを蒙かうむりて、選擇せんぢやくを書しよしき、同年おなじき初夏しちゆう中旬ちゆうじゆん第四日にちせんぢやくほんげんねん選擇せんぢやく本願ほんげん念佛ぶつしゆ集じふの内題ないだいの字じ並ならに南無阿彌陀佛なむあみだぶつ往生わうじやう之業しごふ念佛ぶつねん爲なり本ほんと釋綽空しやくのくわうの字じと、空くうの眞筆しんぴつを以もつて之これを書かかしめたまへき、同日どうじつ空くうの眞影しんえいを申預まをしあつかりて圖畫ずゑし奉たてまつる、同二年閏七月ねんうるふぐわつげ下旬じゆんたいご第九日にちしんえい眞影しんえいの銘めいは眞筆しんぴつを以もつて南無阿彌陀佛なむあみだぶつと若我成佛にやがじやうぶつ十方衆生じふしやうじゆう稱我名號しやうがみやうがうん云ん、必ひつ得とく往わう往じやう之眞文しんもんとを書かかしめ玉たまへき、又夢告またゆめのつげにより綽空しやくくわう



の字を改めて同日御筆を以て名の字を書かしたま  
 ひ畢ぬ本師聖人今年は七旬三の御歳なり、選擇本願念  
 佛集は禪定博陸法名圓照兼實の教命によりて撰集せし  
 め玉ふ所なり、眞宗の簡要念佛の奥義、斯に攝在せり、見  
 るもの論り易し、誠に是れ希有最勝の華文、無上甚深の  
 寶典なり、年を涉り日を涉りて其教誨を蒙むるの人、千  
 萬と雖も、親といひ、疎といひ、この見寫を獲るの徒は甚  
 だ以て難し、爾るに既に製作を書寫し、眞影を圖畫す、是  
 れ専念正業の徳なり、是れ決定往生の徴なり、仍て悲喜  
 の涙を抑へて由來の縁を註す、云云』

と書いて居る。これによつて、如何に親鸞聖人がその師  
 法然に心服したかといふことが想像せられる。法然も  
 亦私かにその門下に此の如き立派の紹述者を出したこ  
 とを喜んだこと、思はれる。親鸞聖人は越後より關東  
 に出で、諸所に往來して、熱心に信心往生の説を唱へ、六十  
 歳を過ぎてから京都に歸つたが、京都には法然の門下が  
 亡師の遺業を承けて念佛往生の教を布き、その勢力が盛  
 んであつたので、親鸞聖人も殆んど手を下すの餘地がな  
 く、其後の四十年間の長日月を著述で送つたのである。



親鸞聖人の信仰

親鸞聖人の信仰は教行信證文類六卷、淨土文類聚鈔一卷、愚禿鈔二卷、淨土三經往生文類一卷、尊號眞像銘文一卷、一念多念證文一卷、末燈鈔一卷、御消息集一卷等の著書によりてこれを明にすることが出来るが、何の理窟も無い、何人と雖も、出離生死の道を求むるには、たゞ「信ずる」の一事で足りるのである。しかしながら、これを宗教として、世の人に勧めるには、釋尊以來歴代の高僧の所説を依據とせねばならぬ。それで親鸞聖人は印度に於ける

龍樹菩薩、天親菩薩の二僧、漢土に於ける曇鸞和尚、道綽禪師、善導大師の三僧、我邦に於ける源信大師、源空聖人の二僧を選びて、淨土眞宗の七祖を立て、大無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經の三經を擧げて、これを淨土眞宗の依據とした。すなはちこれ等高僧の所説、經典の記述は、自家の信仰を證明するための用に供したのである。試みに親鸞聖人が自から説く所を考ふるに

『夫れ眞實の教を顯はさば、則ち大無量壽經、是なり、この經の大意は、彌陀誓を超發して、廣く法藏を開きて、凡小を哀れ、選びて功德の寶を施すること、を致す、釋迦世



に出興して、道教を光闡して群萌を拯ひ、恵むに眞實の利を以てせんと欲してなり、是を以て如來の本願を説くを經の宗致となす、即ち佛の名號を以て經の體とするなり。(教行信證)

『如來選擇の本願不可思議の願海、これを他力とまをす、これすなはち念佛往生の願因によりて、必至滅度の願果を得るなり、現生に正定聚の位に住して必ず眞實報土に至る、これは阿彌陀如來の、往相廻向の眞因なるが故に、無上涅槃のさとりをひらく、これを大經の宗致とす。(淨土三經往生文類)』

固より釋尊一代の教は悉く彌陀の功德を説くものであるが、文字の上に明かに淨土願生を勧めてゐるのは、大無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經の三部のみである。それから、この三部經は勿論、廻向の信心をあらはすを主旨とするけれども、經文には差異があつて、直接に如來の本願を説いてゐるのは大無量壽經である。故に親鸞聖人はこの經を眞實の教として

『念佛往生の願は、如來の往相廻向の正業正因なりと見えて候、誠の信心ある人は等正覺の彌勒とひとしければ、如來とひとしとも、諸佛のほめさせたまひたりと



こそ、きこえて候、又彌陀の本願を信じさふらひぬる上には、義なきを義とすところ、大師聖人の仰にて候へ、かやうに義のさふらふらん限は他力にはあらず、自力なりときこえて候、又他力と申すは佛智不思議にて候なるときに煩惱具足の凡夫の無上覺のさとりを得候なることをは佛と佛のみ御はからひなり、さらに行者のはからひにあらず候、しかれば義なきを義とす候なり、義とまふすことは自力の人のはからひを申すなり』

(御消息集)

此の如くに説いて居る。約めてこれを言へば、阿彌陀佛

を信するのである。この信心を本として出離生死の道を求むるのである。自力の行を捨てて、全く他力の慈悲に頼るのである。



阿彌陀佛

親鸞聖人は此の如く、聲を大にして、『無量壽如來に歸命せよ』と勸める。無量壽如來とは壽命の限のない如來で、すなはち阿彌陀佛である。歸命とは命に従ふといふ意味である。しからば、その阿彌陀佛といふは果して何物であるかといふことを考へねばならぬ。

『涅槃と申すに、その名無量なり悉しく申すに能はず、おろく、其名をあらはすべし、涅槃をば滅度といふ無爲といふ、安樂といふ、常樂といふ、實相といふ、法身とい

ふ、法性といふ、眞如といふ、一如といふ、佛性といふ、佛性すなはち如來なり、この如來、微塵世界にみちくしてまします、即ち一切群生海の心にみち玉へるなり、草木國土悉くみな成佛すと説けり、この一切有情の心に方便法身の誓願を信樂するが故に、この信心即ち佛性なり、この佛性即ち法性なり、法性即ち法身なり、しかれば佛について二種の法身まします、一には法性法身と申す、二には方便法身と申す、法性法身と申すは色もなし、形もまします、さすしかれば心も及ばず、ことばもたえたり、この一如より形をあらはして方便法身と申す、その御



すがたに法藏比丘となり玉ひて、不可思議の四十八の大誓願をおこしあらはし玉ふなり、この誓願の中に、光明無量の本願、壽命無量の弘誓を本として、あらはれ玉へる御形を世親菩薩は盡十方無碍光如來となづけ奉り玉へり、この如來すなはち誓願の業因にむくい玉ひて報身如來と申すなり、すなはち阿彌陀如來と申すなり、報といふはたねにむくいたるゆるなり、この報身より應化等の無量無数の身をあらはして微塵世界に無碍の知恵光を放たしめ玉ふ故に盡十方無碍光佛と申す光の御形にて色もましまさず形もましまさず即ち

法性法身に同じくして無明の闇を拂ひ、惡業にさへられず、この故に、無碍光と申すなり、無碍は有情の惡業煩惱にさへられずとなり、しかれば阿彌陀佛は光明なり、光明は知恵の形なりと知るべし』(唯信鈔文意)

『一實真如と申すは、無上大涅槃なり、涅槃即ち法性なり、法性即ち如來なり、寶海と申すは萬の衆生をきらはず、さはりなくへたてず、導き玉ふを大海の水のへたてなきにたとへ玉へるなり、この一如寶海より形をあらはして法藏菩薩となり玉ひて無碍の誓を起し玉ふを種として阿彌陀佛となり玉ふが故に、報身如來と申す



なり、これを盡十方無碍光佛と名づけ奉れるなり、この  
 如來を南無不可思議光佛とは申すなり、この如來を方  
 便法身とは申すなり、方便と申すは形をあらはし、御名  
 を示して衆生に知らしめ玉をふ申すなり、すなはち阿  
 彌陀佛なり、この如來は光明なり、光明は知恵なり、知恵  
 は光の形なり、知恵亦形なければ、不可思議光佛と申す  
 なり、この如來、十方微塵世界にみちく玉へるが故に、  
 無邊光佛と申す、しかれば世親菩薩は盡十方無碍光如  
 來と名づけたてまつり玉へり』(一念多念證文)

の覺體である。



宇宙の本態

光明無量壽命無量の覺體は、即ち宇宙の本態に外ならずと、余は解釋する。専門學者の所説に據れば佛身論に種々の解釋があることは無論であるが、余は門外漢として、自己の知識に本づきて、親鸞聖人の所説を解釋し、聖人が眞如といひ、一如といひ、一實眞如といひ、又は一如寶海といふところのものは、即ち宇宙の本態で、法性即ちこれであると思ふ。而して、この法性即ちこれ阿彌陀如來に外ならぬのである、しかるに、これには、色もなく、形もな

いから眞如から、その形を現はして方便法身如來となるのであると説明する。全體救濟及び歡喜の本源たる『自己より偉大なるもの』に交はるといふことは、宗教的意識が醇正なる事實を現はすもので、又宗教的經驗の對象が眞實なることも、この經驗の中に存在するものであるが、親鸞聖人が阿彌陀佛を眞如に求め、これを光明無量壽命無量、即ち智慧と慈悲との最大のものとしたのは、聖人の宗教的情操が的確に且つ圓滿に發達して居つたといふことを示すものと云はねばならぬ。

今日、吾人が自然科学的宇宙觀として信奉するところ



の一元論(Monismus)の思想に本づき此の如き阿彌陀佛を見るに、兩者の間に一致するところがある、少なくとも此の如き推論は自然科学的宇宙觀から見ても、合理であることを認められる。余はここにこのことにつきて論述したいと思ふ。

精神科學

科學には、固より多般の種類があるが、大凡これを區別して、精神科學と、自然科學とする。精神科學とは人類の精神の妙用によつて成生するところの現象を研究するもので、自然科學とは、自然界に存在せる現象を研究するものである。

近時、自然科學が非常の發展をしたために、精神科學が著明の影響を受けたことは、已に廣く知られたる事實である。今日の學者の多數が、説く所を聽くと、精神科學と



自然科学とを區劃して互に相同じからざる法則の下に  
 研究すべしと言ふのであるが、しかし批評的に深く考へ  
 て見ると、精神科学と名づけられる、學科もその實は自然  
 界の現象を研究するもので、その系統は自然科学の一種  
 に屬するものである。たとへば廣い意味で言ふ所の歴  
 史、世界史、國家史、地球史並に自然史などは、すべて發生學  
 の一分科に外ならぬのである。言語學、比較言語研究及  
 び心理學は生理學の一部分と看做すべきものである。  
 人類の精神から作り出す所のもの、即ち文學でも、同じく  
 自然の現象に外ならぬものである。故に、狭い意味の自

然科學、たとへば理學、化學、動物學、解剖學、礦物學、地質學な  
 どの類から所謂精神科學を區劃して、これを違つた法則  
 の下に研究せらるべきものであるとするのは、正當の考  
 でないと言はねばならぬ。只自然科学の對象と所謂精  
 神科學の對象とは大に同じからず、複雑なると、單簡なる  
 と形而上なると、形而下なるとの差異があるから互に相  
 同じからざる性質のもの、やうに見えるのである。自  
 然科學が發展すれば、それに從て、所謂精神科學が著明の  
 影響を受くるといふのは、全くこの理に基づくものであ  
 る。然しながら、吾人の認識の一定の限界あることは明



か、自然の實驗的研究には不十分の點が多く、到底自然科学が到達することの出來ぬ部分が多いといふことは明かである。故に、假定説によりてこれを補はねばならぬ、假定説を立つことは固より戒心せねばならぬこと、これは必ず自然の合理的認識に矛盾せざる範圍で、せねばならぬ。百般科學の王と誇る所の哲學も、各個科學の結果をば宇宙觀の一燒點に集中するものとしては、必ず自然科学の智識と背馳せぬやうでなければならぬ。余の考では、所謂精神科學が自然科学の影響を受るといふよりも、寧ろ所謂精神科學も自然科学と同一の法則に

遭ひ、その成果に就て説を立つべきものである。



## 自然科学

自然科学は自然の物質及び現象を認識することにして、主として努力するものであるが、その認識の進歩は今や物理学及び化学の方面に於て、殊に著明であつて、これによつて勢力恒存の法則と物質不滅の法則とが發見せられた。吾人はこの法則により宇宙の勢力は常に一定にして、その分量は變化せず、若し或勢力が消失し又は新に起るが如く見ゆることあらば、それは唯、或勢力が他の勢力に變化したるに過ぎざることを知る。又宇宙の物質は常に

一定にして、その量を増減することが無く、若し或物質が燃えて消失し、若しくは結晶して形を現はす場合あるも、それは單に形式又は結合の變化に過ぎざるものであるといふことを知る。此の如く理學上から立てたる勢力恒存の法則と化學上から立てられたる物質不滅の法則との二大法則を據として、吾人は哲學の上にも實體恒存の原則を立つるのである。斯の如くにして、成立せる自然哲學の見解によれば、宇宙は物質と勢力とより成るもので、物質はこれを分析すれば極微の原子又は電子となる。而してその原子又は電子の交互の間には「エーテ



ル」と名づくる極めて軽き薄き物が充滿して居る。この「エーテル」はこれまでは量るべからざるものとせられ、全く無いに均しいものとして居られたが、近時、理學の進歩によりて、光、電氣等の現象がこれに基づくことを認め、又遂にその密度を測ることが出来るやうになつた。それから又、輓近の實驗に據れば、原子又は電子は引力を有し、「エーテル」は反對に斥力を有し、宇宙の機械的作  
用は全くこの引力と斥力とに歸する事を得べしとせらるゝまでになつたのである。故に、吾人の今日の智識から言へば、物質と勢力とは宇宙の統一的實體であつて、吾

人の周圍に於ける有機體及び無機體、すべての不可思議なる現象も、畢竟同一の物體の形態と結合とが變化したるに過ぎないといふに歸著する。輓近自然科學者が唱道する所の一元論 (Monism) は即ちこの意義に外ならぬのである。



二元論

保守的の頭腦の人人、殊に傳説的の活力論 (Vitalismus) を奉ずる人人の間には、二元論 (Dualismus) が行はれて居る。この二元論は勢力と物質體と心とを全く相離れたる實體なりとするもので、哲學の系統としては甚だ古きものである。この考から進むで、人格神が作られ、これを創造主として世界の保持者とし、人類はこの神より下れるものにして、世界にありて特別の地位を占め、自然界の他のものとは懸隔せるものとする。又人類は宇宙の中

心で、他のものはたゞ人類の用をなすために造られたものであるといふことを信じられて居つた。しかるに、近時古生物學、比較解剖學、個體發生學等の努力によりて、簡單なる複細胞動物から發達して人類に至るまでの徑路が詳にせられ、又ラマルクの適應論、ダルウインの淘汰論のために、地球上の有機物は進化の方法によりて、漸次に發達したものであるといふことが明にせられ、これによりて人類中心の説は破壊せられたのである。今日、吾人は、現に地球上に存在せる動物と植物とはその始め一個の同一物體から發生し、進化の法則によりて分岐し、人類



は脊椎動物中の最も高等のものになつたのであると解  
 釋するのである。又人類を宇宙の中心とするの説に併  
 びて地球を宇宙の中心とするの説があつたが、これも一  
 千五百四十三年コペルニクスのために打破せられて仕  
 舞つた。

新活力論

此の如くにして、古き生活力論は輓近の發生學のため  
 に葬られたので、新活力論が新に起つてこれに代つた、し  
 かるに、これは人類の意識を神祕的に見て、動物の意識と  
 區別しやうとするので、一元論の説く所に背いて居る。  
 輓近の自然科学は人類を始め、他の有機物及び無機物の  
 進化と同様に、精神の進化をも認めて居る。吾人の身體  
 が吾人の祖先たる有脊椎動物から漸次に進化し來りた  
 ると同様に、吾人の精神も、脳髓の一種の機能として、下等



動物から漸次に發達し來つたものであると認められる。  
 無機界及び有機界の發達が此の如き次第であるため  
 に、吾人は今日植物界と動物界とを絶對的に區別するこ  
 とが出来ぬ。これと同様に、下等動物と人類とをも絶對  
 的に區別することが出来ぬ。又更に進みて、有機界と無  
 機界との間にも劃然たる分界をなすことが出来ぬ。故  
 に、吾人は人類の認識の全體は一個の統一體であると信  
 せねばならぬ。従て、この範圍にありて物質界と精神界と  
 を區別することは出来ぬ譯である。すなはち、吾人の認  
 識に入る所の全宇宙は一個の統一體で、一個の共通なる

法則によりて構成せられ、又發展したるものである。



一元論

一元論と名づけらるる學說にも種種の派がある。大別して二類とする。一は哲學上の一元論で、希臘のタレス一派の一元論がこれである。一は晩近の一元論で、自然科学的の宇宙觀と名づくべきものである。即ち晩近の一元論は、晩近の發生學、人類學、解剖學、生理學、動物學、植物學、理化學等自然科学によりて認識したるところを綜合して、結論したる統一的宇宙觀である。この一元論に従へば、物質と勢力とが區別せらるべきものでなく、宇

宙の統一的實體であつて、一個の共通なる法則によりて構成せられ、又發展したものである。吾人の認識に入るところの物體と現象とは種々のものがあるけれども、これはすべて同一の實體が、この形態と結合とを變化したものに過ぎないと論ずるのである。近世の大自然科學者、即ち醫家から出でて、動物學を研究し、發生學の泰斗として名高きヘツケル博士も、物理化學の祖にして、「エネルゲチツク」學說を立て、勢力の形式を以て、宇宙を説明せんとするオストワルド博士も皆、この晩近一元論を唱道するのである。



唯物論

唯物論と一元論とは外観が類似して居る。しかしその内容は大に相異して居る。オストワルド博士はこれを辯明して『唯物論者或は機械論者は、全宇宙をば活動せる物質に歸し唯心論者或は觀念論者は、全宇宙をば精神の流出なりと説く。これは兩方共に同一の方法上の誤謬に陥て居る。即ちこの兩者の場合に於て、いづれも、單一から多般を發展せしめんとし、事實上に現存せる多般の因子を明にすることを忽にして居る。輓近の一元

論は、何か唯一の原理を求めて、これから全宇宙が發展し來たりたることを假定するものでなく、寧ろ輓近の一元論者は、まづ宇宙を以て無限の多般なる渾沌(Chaos)なりと實觀し、それより人の精神力が、科學に一致して、漸次にこの渾沌の中に秩序をつけ、或はこの渾沌より一の齊和(Kosmos)を得べしと説くのである。故に、輓近一元論者にありては、單一が思考の最初をなすものにあらず、却て人の思考の結末として單一が現はれる次第である。』と言つて居る。又ヘツケル博士も、この事を論じて『唯物論は嚴格なる生物學の見解即ち勢力と物質との關係の

● 唯物論



一元論的解釋に反對するもので、又その意味は甚だ漠然である、その正反對たる唯心論の名を以てこれに代ゆることも出来る、實に唯物論の名は全く分別せらるべき理論上と實際上の意味を混同するの嫌がある』と痛言して居る。これによりて、輓近の一元論と、ダーレス一派の一元論及び唯物論など、その外觀が一寸似て、内容の全然相異して居ることが明瞭である。實に、輓近の一元論は、普通の哲學ではない、哲學的説といふことは妨ないが、形而上のものと混淆せらるゝ憂があるので、これを科學的方法 (Methode) と言ふべきである。

汎神論

一面から見れば、一元論は機械的哲學的説であるが又一方から言へば汎神論的哲學的説である。『萬物には一貫の精神がある、精神は宇宙のものに存在する。吾人の身體は單に大宇宙物質の一小部分に過ぎざると同様に、吾人の精神も亦た大宇宙精神の一小部分に過ぎぬ』と説くのであるから、この點は佛教の説に同じである。



靈魂不滅

輓近の一元論は、多般なる自然的現象及び文化的現象の統一を認むるもので、神と世界とを區別せず、物質と勢力とを區別せず、身體と精神とを區別せず、物體と現象とはすべて、統一的のものであると信じ、又これを不滅のものとして信ずるのであるから、この意味に於て、靈魂不滅の説は認められる。即ち吾人が死亡するときは、腦神經の組織をなせる個人的の形態と、これによつて行はれたる働きの表現たる個人的の精神とは、共に消散するが、その腦

神經の組織をなす所の物質は、勿論消滅するものでなく、その化學的結合は分解せられて、更に他の結合を作り、再び一定の作用をなすものとせられる。他の言葉にて言へば、物質の集團的生活が廢絶して、單獨の生活に還るのである。又一方から言へば、吾人の身體の組織が死亡するの時は、一時でなく、甲の細胞が死して、乙の細胞がこれに代り、甲乙丙丁互に相代謝しつゝあるのであるから、第一の「我」と第二の「我」との間には離るべからざる連鎖がある。この意味で、吾人の靈魂は不滅であるといふことが出来る。しかしながら、固より個人的靈魂が不滅



であるといふのではない。今日の宗教家の多數のものが言ふやうな二元論的の靈魂不滅は一元論の認容する所では無い。宗教でも個人的靈魂の消滅を説くものがある、現に我が佛教では五蘊（色、受、想、行、識）の集合が『生』で、五蘊の解散が『死』であるとなし、個人の靈魂を成す所の蘊は、死と共に解散すると説いて居るから、その説は同じく、一元論的の靈魂不滅である。親鸞聖人が淨土往生を説くも、また、この意義に於ける靈魂不滅に本づいて言ふものと、余は信ずる。即ち涅槃といふことは、狹隘なる固有の人格が消散して、單一存在の感情が他のすべて

の生活本態にて充たされ、人格的の苦痛が全く成立することの出来ぬやうになることを言ふのであるから、この場合に於て、個人的精神に就て、云々するのは明瞭である。



一元論と佛教

近頃、マドラスのラクシュミナラスといふ人は『佛教の本態』と題する一書を著はし、輒近の佛教は實際に於て一元論と同一のものであるといふことを論じた。オストワルド博士はこの書を読み、『尠なくとも、この書に書いてある所では、佛教と一元論とが互に一致して居る點があるといふことを斷言する』ことが出来ると言つて居る。オストワルド博士の見た所では、佛教の哲學にては、身體と精神とは區別することの出来ぬ統一體で

ある、而して身體的及び精神的機能は同一の本態の作用の相異に止まるものである。從て自然律の認識につとめ、無生活體と生活體との關係を明にすることを以て倫理の方則を立つるの標準とし、又超自然的の神を排斥するといふことが全く一元論に一致した點である。



基督教

全體神の信仰は、今日行はるゝ所の宗教のすべてに通有のものであるが、基督教の如きは、二元論に本づいて、人格的神を立て、この神が世界を造り、人類及び萬物を造り、これを支配して居ると言つて居る。又一方から論ずれば、眞善美の人格化したものを神とするに過ぎぬとも言はれる。しかしながら、此の如き自然を超越したる人格神は、吾人が現代の自然科学的認識と調和するものでない。

一元論的宗教

ヘツケル博士は、今から二十三年ほど前、一千八百九十二年九月アルテンブルヒに開かれたる第七十五回獨逸醫士及び自然科学者大會の席で、『宗教と科學との連鎖』としての『一元論』と題する演説をなし、一元論に就て、委しく述べた後に、『知識としての自然の一元論的研究、善の教としての一元論的倫理學、美の詮索としての一元論的審美學、この三つのものは吾人の一元論の三大部門である。この三部門の圓滿なる調和によりて、今日多數の



人が求めんとして未だ求め得ざる所の宗教と科学との統一が出来る、これ等の圓滿なる調和の在る所にすなはち純粹なる神の概念が生ずる』と論じて居る。ヘツケルより前に、シユレージンゲル氏も科学的信仰論と題する著述を公にし、ヘツケル博士と殆ど同様の説を立て無限の空間に充滿せる宇宙的「エーテル」を名づけて神とすることは差支ないとして居る。その他、ストラウス氏の舊信仰と新信仰ドレーバー氏の宗教と科学との衝突の歴史、レツツエル氏の自然科学的宇宙觀、コッホ氏の進化論に於ける自然及び人類の精神、サヴェージ氏の「ダル

ウイン説に本づきたる宗教」等數種の著述があつて、皆一元論的に宗教を改革せむとつとめて居る。

この意味で言ふ所の神は抽象的のもので、宗教的意識の象徴に過ぎないと言つてもよろしい。故に、基督教のやうな宗教の神の見方からいへば、一元論の所説は無神論である。しかし、この場合にありて、無神論の宗教が成立することが出来る、即ち科学的の宗教が存在することが出来るといふことは已にクラインソルゲン、ステルン等の諸家が熱心に唱道する所であるがヘツケル博士も、『輓近の自然科学の發達は、單純の理性をして、まづ單に理



論的の宇宙觀を立つるに止まつて居るが、早晚實際の人生問題に這入て來て、社會的、倫理的、政治的、教育的の諸方面に行はれて、遂に一元論的宗教 (Die monistische Religion) を成立するに至るべしと言つて居る。ヘツケル博士等が始めてこの言をなしてから二十年、今日では、ヘツケル、オストワルド等諸家が自から張本人となつて、一元論者團體を造つて、盛に運動して居るが、余の考ではこれは已に宗教である、少なくとも宗教的運動であると言ふことが出来るのである。

宇宙即如來

親鸞聖人の佛身論は、既に前にも言つた通り、『法性を指して阿彌陀如來とする』のである。法性は實相ともいひ、常樂ともいひ、眞如ともいひ、一如ともいひ、無爲法身ともいひ、無上涅槃ともいひ、實に宇宙の本態と見らるるものである。佛身を指して直ちに法性眞如、一如等とせしは、その意義實に明白で、ヘツケル博士が輓近の一元論に本づきて、宇宙の勢力の總和を指してこれを神とすべしと説くのと相違がない。固より親鸞聖人の説は内省



的思索に出で、今日の意味で言ふ所の自然科学の知識に本づいたものではない。しかしながら、『如來は一切群生海の心にみち玉へり』とか『草木國土悉く成佛す』とかいふやうな汎神論の考から論理的に推論すれば、此の如く宇宙の本態を阿彌陀如來とするといふことは、必ず歸著すべき標點である。

親鸞聖人は更に説明して、『法性に二つある、一は法性法身で、一は方便法身である、法性法身といふは色もなく、形もなく、従て心も及ばず、言も及ばず、これ即ち真如である、この真如より形をあらはしたのを方便法身といふの

である』といひ、唯信鈔文意に『法性のみやこより、衆生利益のために娑婆界に來たり玉ふ故に來をきたるといふなり、經に従來生とのたまへり、從如といふは真如なりと申す、來生といふは來り生ずといふなり』と説いて居る。これによつて、親鸞聖人の思想が今日の一元論の所説と同じく、宇宙の本態を認めて、これを真如とし、法性とし、この法性から阿彌陀如來をこの世に來たり生せしめたと説くも、強ち不合理では無いと余は信する。

佛教の各派中、天台は諸法實相とて、靈妙自在の理が活動して宇宙の萬有を生じたりと做し、華嚴は自性清淨の



一理で以て宇宙の發展を説いて居る。何れも主觀の上  
 に宇宙の本態を發見せんとするものであるが、淨土門の  
 教では、これに反して、如來の上に、宇宙を發見せんとする  
 如來即ち法性、宇宙即ち如來とするのである。この場合  
 に於て、佛性の文字の用ひらるゝに對して、ヘツケル博士  
 は、神性(Theophysis oder Gott-Natur)の文字を用ひて居る。神  
 性といふは宇宙の本態(Weltwesen)で、物質(Substanz)といふ  
 も、物質の根元(Urgrund der Substanz)といふも、皆同一のもの  
 である。故に、一元論でも、親鸞聖人の教に於けると同じ  
 く、宇宙がなければ神が無いといふことになる。

宗教的象徴

親鸞聖人は此の如く眞如より來生せる佛を尊崇する  
 に、『南無阿彌陀佛』又は『盡十方無碍光如來』又は『歸  
 命無量壽如來』の名號を用ひて居る。無量壽如來に歸  
 命し阿彌陀佛に南無するといふ意味は、全く如來又は佛  
 の命に従ふといふことである。これが全く抽象的の象  
 徴であるとは、蓮如上人御一代記聞書に、『他流には名號  
 よりは繪像、繪像よりは木像といふなり、當流には木像よ  
 りは繪像、繪像よりは名號といふなり』と言つて居るの



でもよくわかる。この蓮如上人の言は、よく親鸞聖人の意思を明白に示したものであるといつてよろしい。しかるに、此の如き抽象的の神では、宗教的意識の満足を得ることが六ヶ敷いといふ論者もある。殊に超自然的のものでなければ、宗教の中心とならないなどと論ずる人もあるが、實際決してさうでない。卑近の例であるが、たとへば、ここに故人の遺著若しくは遺墨があるとする、若し故人の人格を知つて居るものがこの遺著若しくは遺墨を見ると、故人の人格が髣髴として眼の前に現はれ來りて、崇拜の念がここにかかるのである。若しその故

人に就て何等の知る所が無い場合であれば、その遺著若しくは遺墨に對するも、少しも崇拜の念が起るものではない。全體、宗教はその究極に於て、個人的事項で、その人の知識、經驗によりて左右せらるるものである。従て、各人各個人、自己が最も有効なりと認むる方法で宗教的事項を處置するものであるから、佛陀を見る場合にも人によりて相異がある。親鸞聖人は阿彌陀如來を以て知惠の塊、慈悲の塊と見た。宇宙勢力は實際に知惠の最大なるもの、慈悲の最大なるものとするのは合理である。佛教中、他の宗旨が觀念を主とし、佛の相好等を重く見るに反して、



親鸞聖人の教が、どこまでも、『聞其名號、信心歡喜』で名號を本尊として居ることは注意すべき點である。

佛凡一體

此の如くに論じ來たれば、慈悲無量、壽命無量の覺體たる如來が、衆生を攝取して捨てざるは無論のこと、如來と衆生と、その體は各別なれども、如來の心と、衆生の心とは全く相通じたものであると考へねばならぬ。これに依りて他力信心の趣旨が徹底する譯である。親鸞聖人が『彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、助けんと思召たちける、本願のかたしけ



なさよ』といへるは、實にこの眞意を示すもので、如來の本願も、衆生の信心も、つまり同じものであるといふことに歸著する。若し如來が超自然的のものであつて、衆生と對立して居るものとすれば、それは吾人に取りては誠に頼りの少ないものである。如來の心即ち佛心と、衆生の心即ち凡心とか、同一のものであるといふことが自覺せられ、自分は今、如來の慈悲心の内に懷抱せられて居る、どこまでも如來と一處に生活して居るものであると考へて、始めて、南無阿彌陀佛の難有味がわかるのである。

安養淨土

クラインソルゲン氏は宗教の神髓は、美しくして且つ貴とき、未來の福音であると言つて居るが、親鸞聖人の教では、『吾人は如來の本願によりて未來は必ず安養淨土に往生すべし』と説くのである。唯信鈔文意に『極樂と申すはかの安樂淨土なり萬の樂を常にして苦しみまじはらざるなり、彼國をば安養といへり、曇鸞和尚はほめたてまつりて安養と申すなりとのたまへり、論には蓮華藏世界ともいへり、無爲ともいへり、涅槃界といふは無明



の迷をひるがへして無上覺をさとするなり」と説いてある。故に、この教に従へば、『眞實の信心を得たる人は攝取の光にをさめ取られまゐらせたりとたしかにあらはせり、しかれば、無明煩惱を具して、安養淨土に往生すれば、即ち無上佛果にいたる』『大經往生といふは如來選擇の本願、不可思議の願海、これを他力と申すなり、これ即ち念佛往生の願因によりて必至滅度の願果を得るなり、現生に正定聚の位に住して、必ず眞實報土に至る、これは阿彌陀如來の往相回向の眞因なるが故に無上涅槃のさとりを開く、これを大經の宗致とす』『本願力に乗すれば眞實

報土に生まるること疑ひなければゆきやすし』『眞實信を得たる人は本願業力の故に、自然に淨土の業因たがはずして、かの業力にひがるる故にゆき易く、無上大涅槃にのぼるにきはまりなし』といふことになる。その安養の淨土、安樂の淨土、極樂淨土等といふものは、全く如來の國である、如來即ち法性、法性即ち宇宙勢力であるから、吾人の身體に結合せる五蘊は、命の終りで解散せる五蘊は、故の法性即ち宇宙勢力に歸るといふのである。往生は即ち成佛で、成佛は佛となる、即ち如來となるのである、即ち宇宙勢力に復歸するのである。これ即ち滅度、一に涅槃



槃といふもので、煩惱もなく、苦痛もなく、誠に極樂の世界である。

此の如く、吾人が平生に於て往生せんと望むで居るのは極樂淨土、無爲涅槃界であるが、この一生を終らざる前も、已に如來の本願を知り得たるときは、即ちこれ涅槃の境界に入りたるものにして、これを平生業成とも、即得往生ともいふのである。即ち、臨終の時來れば、直ちに無爲涅槃界に到りて如來と同一の體となることが出来る資格を得るといふ次第である。

安養淨土は何處にあるか、これは詮索を要する所でない。

い。主觀的の意識生活が減じて、こゝに死といふ事實が起つても、吾人の靈魂、詳しく言へば勢力は決して滅亡するものではない。故に、人類の後生を説いて、安養淨土に往生すといふのは、宇宙勢力の一部が、結合して吾人の身體を成して居つたのが、その結合を解いて、又故の宇宙勢力に歸つたとするのは、今日の一元論から見て、合理のものである、これに宗教上の色彩を附けて、淨土の名目を立つることは、宗教的生活の上に、有用である。



往還廻向

親鸞聖人は又往相廻向と還相廻向とを説いて居る。  
 往相とは往生淨土の相で、還相とは還來穢國の相である。  
 廻向とは廻轉趣向の義で、自を廻して他に向ふことをい  
 ふのである。この説に據ると、衆生が淨土に往生するた  
 めの信心は如來よりの廻向（往相廻向）で、既に淨土に  
 往生したるものが還り來りて、再びこの娑婆に廻入し、衆  
 生を救済する大悲の作業も同じく如來より廻向せられ  
 たるものである（還相廻向）。これ一方から見れば、衆生

の信心が、如來の慈悲より賜はるものとして、絶對他力を  
 示すものであるが、又一方から見れば、吾人衆生は如來の  
 慈悲によりて、娑婆より淨土に往き、淨土より娑婆に還る  
 ことを得るものとする考を示すものである。而して、此  
 の如き生生世世の生死の反覆は、軌近の一元論的にも同  
 く推論し得らるるところである。



## 在家の宗教

親鸞聖人は、在來僧侶の俗を破ぶり、斷然在家の行儀を以て、妻を持ち、子を持ち、無戒の一比丘として本願の念佛を證明した。これ實に非常のことである。尋常一様の凡人の爲し得べき事でない。淨土宗の徒の書いた正邪強會辨に『親鸞は何ものぞや頭を禿にして妻子を蓄へ、肉味に耽着する一個の禿居士にあらずや』と罵倒してあるが、この種の俗論は、今日でも、親鸞聖人を批難するの材料となつて居る。親鸞聖人は師匠法然が瀕死のとき

まで口にしたる『寺院を建つるな』の戒告を守り、仰山な建物を造らず、普通の民家より少し手廣い所で、布教をした。又その説教の時の姿はいへば、墨の衣に墨の袈裟であつたと傳へられて居る。當時の僧侶は一體に華美な彩色の法衣を著けたもので、墨の衣、墨の袈裟はまづ俗人に近い姿であつた。此の如くにして、法然のために、山から下されたる宗教は、親鸞聖人のために、全く町の真中にまで移されて仕舞つたのである。出離生死の道を求むるためには、家を捨てねばならぬ、妻子を捨てねばならぬ、山へ登らねばならぬ、世間から離れねばならぬとい



ふことでは、その宗教は吾人の實際生活からは隔離したものである。法然が早くこの點に着目し、親鸞聖人がその意思を承けて、淨土真宗を在家の宗教としたのは實に卓見と稱せねばならぬ。而して、親鸞聖人が法然門下の他のものと異なりて、法然の真意を攫み、淨土真宗の真意を發揮したために、却て法然の門下より排斥せられ、淨土宗では何時の間にもやら、その記録を訂正して、親鸞聖人を法然の門下の列から削除した。これ實に不可思議のことである。

## 宗教と科學

宗教は固より科學では無い。科學は智力に本づき、宗教は感情に基づくものである。言ふまでもなく、宗教の情操は、眞善美を綜合したる完全の理想によりて生ずるもので、理想の完全のものである。これによりて、その人の人格的中心を變じ、利己的の物質的境涯から、利他的の精神的境涯に遷すものである。若しこの宗教の情操が十分發達して居ないときは、吾人の精神生活は寂莫で、殆ど堪ゆることが出来ないやうになることがある。



全體精神活動の状態に比較して考ふるに、科學は覺官に相當するもので、その研究の對象は現存せる事物と、その生成の徑路とである。その性質的研究をするのは哲學の範圍に屬する。即ち哲學は自由の思惟作用で、精神内部に於て如何の感じが生ずるかを研究する、これで道徳の基礎を作り、又これを教ふることも出来るが、その道徳に生命を與ふるに至りては、宗教の力に頼らねばならぬ。即ち宗教は社會組織の意思に相當するもので、すべての最高藝術及び偉大なる行爲はこれから生ずるものである。何れにしても、宗教は感情の範圍に屬する者

で、智力を本とする科學とは殊別のものである。故に、親鸞聖人も『他力眞實の旨をあかせるもろくの正教は、本願を信じ、念佛をまをさば佛になる、この外、なにの學問かは往生の要なるべきや』と、往生の業に學問の要なきことを言つて居る。しかしながら、感情も智力と同じ精神の妙用で、その發達を十分にするには、智力の力を藉ることを要する。故に、宗教も、科學と、相關渉する場合がある。即ち眞實の宗教は、當時の人々の科學的知識に相應せるものでなければならぬ。親鸞聖人の淨土眞宗の教が、輓近の一元論に相背馳せぬといふことは、實にこれ眞



實の宗教であることを證明するものであると余は信ずる。又學問して佛の本意を知ることには、宗教的情操を満足せしむる上に、大なる効果がある。故に、親鸞聖人も「學問せば、いよ／＼如來の御本意を知り、悲願の廣大の旨をも存知して、云云」と説いて居る。

### 親鸞聖人終

大正五年一月廿五日印  
大正五年二月廿七日發

行 刷

定價金貳拾錢

### 不許複製

著 作 者	富 士 川	游
發 行 者	東 京 巢 鴨 町 二 ノ 三 五 原 子 廣 宣	
印 刷 者	東 京 本 所 區 番 場 町 四 守 岡 功	
印 刷 所	東 京 本 所 區 番 場 町 四 凸 版 印 刷 株 式 會 社 本 所 分 工 場	
發 行 所	東 京 巢 鴨 町 二 ノ 三 五 無 我 山 房	振 替 東 京 三 一 二 二 番



佐々木月樵著

### 親鸞聖人傳

金二圓五十錢 郵税十二錢

多田鼎著

### 親鸞聖人

金五十錢 郵税八錢

浩々洞編

### 親鸞御傳鈔

金三錢 郵税二錢

浩々洞同人著

### 親鸞御傳鈔講話

金一圓七十錢 郵税十二錢

金子大榮著

### 眞宗の教義及其歴史

金一圓五十錢 郵税十二錢

大草慧實著

### 英文眞宗要旨

金七十錢 郵税六錢

南條博士著

### 佛說無量壽經 佛說阿彌陀經

定價一圓五十錢 郵税八錢

柏原祐義著

### 淨土三部經講義

定價二圓 郵税十二錢

本著者は古今の諸傳は勿論當時の古文書古記録等をも研究綜合し、更にまた自ら全國の遺蹟を巡り、加えて前後九年間の苦心に成りたるものも、聖人の加へた書は他力教の縮寫なるを以つて、人の本に依りて生涯の記及び其教旨を領得するのみならず、單に傳記の大なる人格と不盡の生命とに接するべし。附録一覽は古今の親鸞傳七十八部及其梗概を録す。

御傳鈔は本願寺三代目の法主覺如上人の親選にして親鸞聖人傳の最も古きもの也而して毎年報恩講に於て拜讀するものはまた本書なり。故に施用として最も適當なるもの也。

親鸞聖人滅後卅餘年覺如上人が舊蹟巡禮し泣く尤も深く聖現しつゝ人々を渴仰し尤も厚く聖人を體ある浩々洞の諸師相謀りて本鈔を繕き謹みて成りたり。本書は生活と生活とを江湖に披瀝せんとし、至趣を講ずるも各段毎に字解と大旨を掲げ、摺と及其詳細なる繪とを附す。

從來淨土眞宗の綱要を説明した書は何れも其一部に限られ、又は枯淡乾燥に流れてゐるが、本書は親鸞聖人の宗教を最新最完全の様式の下に、豊麗に記してゐる。即ち教理、歴史の二方面より著者獨特の燭眼博識に依りて廣く三經七祖に亘りて聖人の全宗教を現代に活躍せしめ、居る。苟も淨土眞宗の流を吸みれば親鸞聖人を慕ふ人士は是非本書を色讀せればならぬ。

淨土眞宗の歴史、宗義、安心を平明に叙述して佛教に關する術語をすべて知らない西洋の人々に一讀して、能く理解し得る様に解説したので、本書である。編纂の目的は外人に眞宗の要旨を知らせんか爲めであるから、英文を以て刊行し邦人にも讀み得る様に和文をも添へてある。

梵本から直ちに和譯にした御經は建國已來この書が始めてある本書には從來の五存大經を對照してある。尙ほ卷末に阿彌陀經の梵本和譯を附録としてあるのは至極結構な書である。

今迄の講義は餘りに専門的に門外者に了解できなかつたのは佛教上に於ける最大缺點である。本書は讀方、文科、大意、講義、餘義の各項を設け極めて平易に而も丁寧懇切に解釋し初めて佛教を學べんとする人にもよく了解する事ができる。本書は三部經獨學者の唯一指針なり。







浩々洞編  
清澤全哲學及宗教  
集第一  
金二圓五十錢 郵税十二錢

浩々洞編  
清澤全信仰及修養  
集第二  
定價二圓 郵税十二錢

浩々洞編  
清澤全日記及語錄  
集第三  
金二圓 郵税十二錢

浩々洞編  
清澤先生の教訓  
金六十錢 郵税六錢

澤柳政太郎氏本書を推奨して曰く、明治年間、我が國は物質的方面に於て幾多の人物を生じた。然し其の精神界に於ては清澤先生の短生能は、この間に於て清澤先生の遺著を以て、その精神上の遺産として、明治年間、於ては、明の一大産物として、敢て之を現代並に後代に推奨せしむべき也。

死に瀕ししつゝ、あつた明治佛敎を蘇生せしめた唯一の偉人は清澤先生であつた。京都帝國大學總長澤柳氏は「退耕錄」に福澤氏と並べて明治の偉人と推賞し、故藤岡博士は「國文學史講話」に明治の宗教を云ふ人は清澤氏を忘れてはならぬ。か書いたその清澤先生の全集の第二巻にしては、先生が信念修養に關する教示を編したものである。

本書は先生一代の日記及び書翰を輯録し、これに先生の朋友知人たりし澤柳氏、岡田氏等數十人の口より語られし先生の實際生活の叙述を集めたものである。學生時代、教師時代、教界雄飛時代、肺病靜養時代、家庭破壊時代、信仰復活時代の先生の眞面目が如何に活躍してゐるかを味へ

本書は清澤先生の三巻の全集から其の精要を鈔録して、以て先生の信念と思想とを簡明に現はせるものである。全篇百章、言々句句、これ皆先生が心血の文字、簡潔にして含蓄するところ多し。枯淡に似て深く潜熱を藏するもの故に熟讀するに随つて、次第に先生の面目に接し、玩味するに益々新なる啓蒙を受けず居られぬ。

曉鳥敏著  
清澤先生の信仰  
定價八十錢 郵税八錢

浩々洞編  
清澤先生の信念  
金三錢 郵税二錢

京大澤柳總長序  
安藤州一著  
清澤先生信仰坐談  
定價卅五錢 郵税四錢

清澤滿之著  
精神講話  
定價三十錢 郵税四錢

「彼は先づ哲學者として豫想された自らも亦、衣期しつゝ、出家となつた。一朝感ずる所ありて、忽ち麻衣水道の出家となつた。重んじて智を研ぎ行を勵んだ。かくて一派の革命を企てた彼は、最後、對他力の信念に安住した。彼とは誰ぞや、教界の偉人清澤先生である。今その生涯思想及信念を忌憚なく傳へたのが本書である。」

本書に收むる處のものは、絶對他力の大道、他力の救濟、我信念也。我信念は、これ先生の絶筆にして、また最も圓熟したる先生の信仰の告白也。されば何人も本書を讀んで、信味の資となすべきもの也。

澤柳先生の序文に曰く、「余は世の修養に志せる者に、すゝむるにこの小冊子を再三熟讀せんことを以てするものなり」と先生今や世にあらざるも、世人は必ずこのうちに活躍せる先生の面影に接して、長へに無上の教訓を受くべし。

精神修養に關する先生の經驗を述べたまへる者を集めて一冊子としたるを本書とす。故に眞摯に自己の精神の修養に心がくる者又は熱心に内心の安住を求むる者、一度本書を讀まなければ、其所得蓋し、渺からざるべし。







大谷初亮序  
梅上露露序  
**眞宗聖典**  
特價 金襴表裝一冊廿錢  
クロイヌ表裝一冊十錢  
郵稅各八錢

大派用聖典は立花師節譜の伽陀文類正信保念符和讃二陶三陶五陶式間念佛を収む、本派用聖典は澤園師章譜の梵唄禮及三帖和讃全部を収む、而して各聖典に親鸞聖人全書及蓮如上人全書を収む、故に本書一冊を懐にせばいかなる場合に於ても不便を感ずることなし。

知恩院法主序  
望月信道編  
**淨土宗聖典**  
特價 金襴表裝一冊六十錢  
クロイヌ表裝一冊四十錢  
郵稅各十二錢

淨土宗聖典は淨土宗の全分を打つて一冊とせる聖典也。即ち淨土宗の教義、淨土宗の信仰、淨土宗の經教、淨土宗の儀式、淨土宗の起原及び法然上人の人格を知らんと欲する者皆本書を讀むべし。特に後伏見天皇の勅命に因りて撰集されたる四十八卷の傳記は鎌倉全佛敎の具體的標示にして修養書の上乗たり。これ本書が淨土宗の權與してまた聖典たる所以也。

日蓮宗聖典  
宗長長須序 雲田一龍編  
關本法寺宗長序 山田一英編  
**日蓮宗聖典**  
特價 金襴表裝一冊四十錢  
クロイヌ表裝一冊二十錢  
郵稅各八錢

本書は法華經と聖日蓮の遺文を以て組成す。法華經一部八卷は音訓兩點として開結二卷は訓點として之に要品を和訓す。御遺文は御抄八十餘章を大意類、宗要類、教義類及御消息類等に分ちて書き下し之に總ふりがなを附したれば全篇何處を見ても讀めぬ處なし。附録として御傳記撰經要文、回向文等の全部を網羅す。

古義眞言宗聯合長 者 題子 浦上隆應大僧正授願童子  
新義眞言宗山崎管長 題子 長 松 授 願 童子  
新義眞言宗山崎管長 題子 長 松 授 願 童子  
**眞言宗聖典**  
特價 金襴表裝一冊七十錢  
クロイヌ表裝一冊五十錢  
郵稅十二錢

眞言密敎所依の經論常用諸經等百餘種を網羅し和訓し振假名を附し誰にでも讀み得る本邦未曾有の聖典也。是れ斯敎研究者に對する唯一の指南なり。斯宗隨喜の士にとりては唯一の善知識なり。秘密の庫を開かんとして終りに在家勤行誦文和讀をも添へれば價俗共に至便なることを待たるべし。

釋宗 日蓮聖典  
來馬琢道編  
**禪宗聖典**  
特價 金襴表裝一冊四十錢  
クロイヌ表裝一冊二十錢  
郵稅各八錢

禪宗の經典祖錄百餘種を網羅し、和訓し、振假名を附し、誰にでも讀み得る本邦未曾有の寶典編者十數年の蘊蓄を傾けて今や世に出づ禪を知り禪に參ぜんとする者は先づ本書より入れ。内容目錄は申込次第送呈す。

釋三宗管長、洞研南大學長、各專門道場師家、大石前管長、河野前管長、三井銀行理事三、好傳管長、近東帝國大學教授、安藤文雄、著  
**禪學辭典**  
定價金四圓 郵稅十六錢

禪書に顯れたる文辭は悉く説明され、公案の要旨は淺く解説され、三國に渉る禪師大徳の傳記、禪錄、地名、禪院、叢林日用の規矩、法要器具其他一般佛語の禪的解釋より禪門通用の故事、術語、隱語に至るまで、一も餘さず、約萬餘の語項目に就いて叮嚀懇切、簡明適確に解説され、而も行文平易にして何人にもわからざる所なし。

來馬琢道著  
**大智禪師偈頌講話**  
定價一圓五十錢 郵稅十二錢

大智禪師の偈頌は用語自在、宗乘到る處に陰顯して之を讀過するすら甚だ困難を覺ゆ。本書は先づ「本文」を掲げ次に「讀方」を示し次に「字義」を明し「典故」を詳にし次に「大意」を説き更に詳細なる「講解」「提唱」を附す且つ全篇總ふりがなを施したれば如何なる初心者と雖も一讀して其宗意まで了解せざることなし。

禪學普及會編 發行中  
**禪學通解全書**  
金 十圓 郵稅六十錢

本書の内容  
□從容錄通解 □碧巖集通解 □洞山選解 □普勸坐禪儀通解 □學道用心集通解 □坐禪用心記通解 □臨濟錄通解 □參同契通解 □寶鏡三昧通解 □五位逐位頌通解 □無門關通解 □心王銘通解 □信心銘通解 □證道歌通解



安藤文英著  
碧巖集通解  
金二圓 郵税十二錢

碧巖集は禪門第一の書也。然るに古來其難解なるが爲に古學者の均しく苦む處。本書は之を補ひ、易に字を以て、故に事字を以て、其の原最易なる之を以て、其の最長參考也。提唱する處を別し、禪學の要領を以て、其の最長參考也。

神保如天著  
從容錄通解  
金二圓 郵税十二錢

從來の禪書の提唱は講はあまりに専門的にして、一般讀者の了解は苦む。本書は三號活宗を以て、原典の學を別し、之に於て、其の要領を指摘せり。

紹益禪師提唱  
今津洪嶽講義  
碧巖集講義  
全三冊各一圓五十錢 郵税各十二錢

紹益禪師の提唱本則百章類則三百章を中心とし、之に加ふるに、斯道に造詣深き洪嶽師が垂示則、頌着語、評唱に涉りて、丁寧なる讀方、元作義を施したるも、かりにも假名を讀み得るに新紀して、本書を繙かば、萬人皆其快明の玄旨を探り得て、岩の如き不動の精神とならん。

白隱禪師著  
遠羅天釜  
定價十五錢 郵税四錢

世に參禪の針路を示せる書籍多しと雖も、多くは難解の文字にして、其の義を得る極めて難し。且つ、在家の人には教へたるもの甚だ稀也。今此禪師の「遠羅天釜」は旨遠くして、辭卑く且つ平易にして、在家初心のものにも了解し易き極つて、重寶なるなり。尙ほ附録として、御多福女郎紛引歌を添へたり。

多田鼎著  
佛傳涅槃編  
定價八十錢 郵税八錢

夕日が宇内に光被するやうに釋尊の人格は將に涅槃に近い鮮である。本書は謹嚴の筆を以て、六歳の日子を費し、南北佛傳及び廿餘種の經典を纂譯したる者實に釋尊の血であり、精髓である。苟も釋尊の尊容に接せんと欲する人は本書を讀め

山邊習學著  
佛弟子傳  
定價一圓七十錢 郵税十二錢

十六羅漢の外尙數十人の詳傳を載せ、苟も經典に現はれたる諸弟子の事蹟は、殘らず之を網羅せり。舍利佛、日蓮、迦葉、阿難等の宗教的の人物が、大聖釋尊を中心として、當時の社會に活躍せるは、絶大の偉觀也。而して本書は世界獨歩の名著也。

多田鼎著  
大聖釋尊  
定價八錢 郵税二錢

大聖釋尊の人格がいかに偉大であるかを最も簡単に最も尊く書きあらはしたのが本書である。

リス、デピナ博士著  
赤沼智善譯  
釋尊の生涯及其教理  
定價一圓七拾錢 郵税十二錢

著者印度に在ること多年、佛敎最後の證據たる巴利語聖典を盡く渉獵し、其研究の基礎として、組織的科學的研究したる本書は釋尊傳として、無上の寶典也。研究の著書なりと雖も、行文通俗にして、文字潤澤、大に讀み易し。三千年來世界に大光明を輝せ給ふ釋尊の人格に接することを得べし。附録「初期佛敎」は釋尊當時の時代史なり。本書は最近發行第一版に依り譯したるもの也。



見よ!!! 清光の新と全同人の英姿と!!!

# 精神界

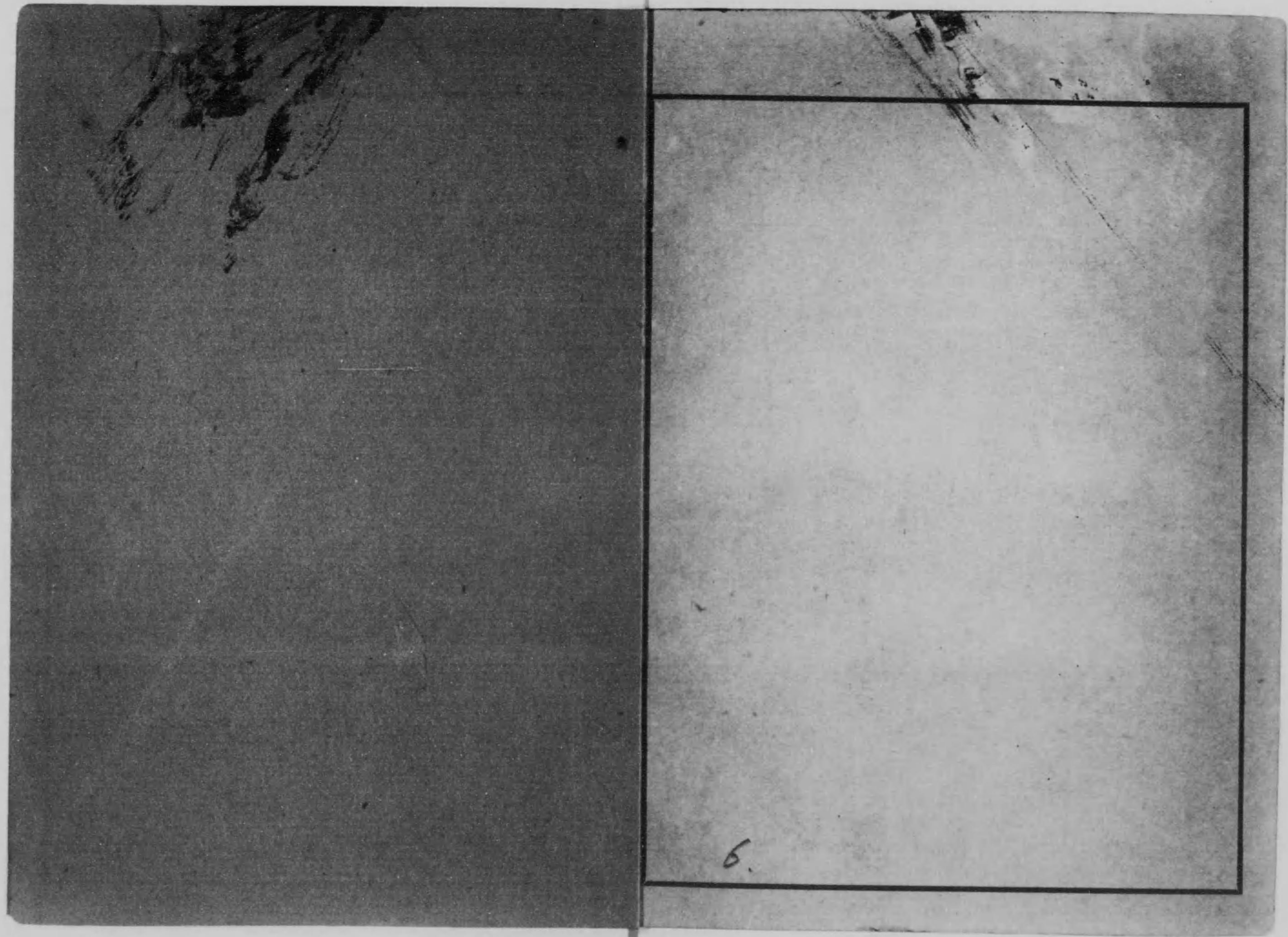
■毎月一回発行日・新年號廿一錢・一年圓十七錢・上半九十九錢■

朗らかに胸を押しひらきて、飽くまで純眞の歩調をそろへ、高く澄みたる清新の序幕を切り落すべく、燦たる使命を帯びて躍り出でたる我が精神界の笛の高鳴りを聞け!

新たに巻頭に設けられし「本領」は、迷うて行く處を知らざる教界に、眞實悲願の行方を指し示し、更に巻末の「生活告白」は、道行くものの無量の涙に輝きて、欣求歸命の兩手を組み合し、更に又「古典の研究」、「近代宗教思想の講話」に至つては、現代宗教界の唯一の權威、奮起せる同人の革命の聲なり!

げにも新しき年の、新しき日は來ぬ。吾等今、身に曙光を浴びる者、いかでか生命なき古き形骸の上に座食するを忍ぶべき!さはれ、何よりも先きに眞實に生きんとする人こそ、願はくば吾等が新道場に來れ!







70  
337



終

